

明石の史跡（30）太寺の百姓藤次郎



文政の頃（1818～30）、太寺の藤次郎なる百姓の物語である。ある時、手慰（おそらく博打であろう）みに打ち負けて、苦しい日常生活を強いられるようになった。その打開策として、彼は桃の栽培を思いついた。そこで東本町の船屋・常本屋本家・江嶋屋にお願いして、数百株に及ぶ桃の苗を入手。桃畑を開いた。同時に100羽の鶏を飼育すれば、さらに利益の増大を考えた。そのうえ桃畑の中に300坪の土地を垣根で囲い、数十の区画を作り、各区画に菜種の栽培をもくろむ。菜種の成長とともに、各区画に鶏を順次送りこみ、菜種の下葉を餌としてついでませば、鶏の飼養にも手間がかからず、上部の花や実には鶏の嘴も届かず、何等の支障もなく、菜種の収穫を得ることができると計算した。しかも鶏の排泄物は鶏糞として知られ、有効な肥料でもある。まさに良い事づくめ。ここまでは藤次郎の算盤どおりに展開したようである。

俗諺に「桃栗三年柿八年」といわれ、なかには「土州紀州ニハ一歳桃」もあって（重修本草綱目啓蒙21）、藤次郎が栽培したものの品種までは確定不能とはいえ、早期の収穫が期待できる植物であることは間違いない。

しかし、物事にはリスクがつきものである。毎年3月になると開花し、話題を呼ぶ。そこへ桃の苗を寄付した船屋・常本屋本家・江嶋屋の面々が、大勢花見に押し寄せる。花見には、酒食をともなう宴会がつきものである。この出費が、折角の桃の収入を吹き飛ばす、大赤字となる。腹を立てた藤次郎は、桃の木を伐採して廃業のはこびとなる（明石名勝古事談）。

文政の末年までに刊行された『倭訓栞』前編（谷川士清著）には、「須磨兵庫辺には家ごとの軒に柳と桃を交へ挿」すことが、記載されており、藤次郎の桃栽培のヒントは、案外このようなどころから得たのではなかろうか。